

2005（平成17）年度 在宅医療助成 勇美記念財団

研究助成 完了報告書

「中山間地域に居住する高齢者を取り巻く生活環境と  
健康維持に関する研究」

研究代表者：細川 つや子

所属機関：吉備国際大学保健科学部看護学科

所属機関所在地：〒716-8508 岡山県高梁市伊賀町八

共同研究者：近藤 多美

医療法人 仁智会 ケアプランハーネス  
介護支援専門員

報告日：2006年8月31日

本研究は、中山間地域に居住する高齢者の健康維持に向けて、高齢者は何に支援を必要としているかを知り、その地域で健康に生きるための支援への示唆を得ることである。

## I. 研究目的

- ①. 中山間地域に居住する高齢者の生活状況、主として社会資源の活用方法や社会資源利用に関する高齢者の意識を知る。さらに、ニーズを知ることによって、それに対するサービスを検討していく上での材料とする。
- ②. 高齢者を中心とした他領域との連携を模索する。高齢者の生活を丁寧に追うことで、高齢者の生活キータームの中から何を連携の方策と見るか、今後の中山間地域における生活実態を知る。
- ③. 健康問題を中核に据えた、保健・医療・福祉システム（サービス提供者間）の相互性を射程においた方策・投げかけを模索する。

## II. 用語の定義

中山間地域：明確な定義はないが、農林統計における区分による「中間農業地域」と「山間農業地域」をあわせた地域を「中山間地域」としている。

高齢者：要支援、要介護1、要介護2を対象とした。これは、介護法改正前の区分による高齢者である。

## III. 研究方法

### 1. 調査方法

- ① 支援事業所の職員と共に利用者を訪問し、支援内容等の参加観察を行う。対象者は要支援者、要介護1、要介護2の認定を受けている利用者とする。  
場所はA県東部に位置するB村を中心としている。
- ②参加観察したものはフィールドノートに作成する。
- ③利用者及び家族に許可を得、半構造的インタビューを行う。許可を得られればテープに取り、できない場合はその会話を早期にプロセスレコードに起こすこととした。

### 2. 研究協力の選定

共同研究者により、調査対象者の選定と参加観察者の許可を利用者に得て、さらに調査者と支援者の連携を図る。また、他の支援者・調査協力者、介護支援専門員（ケアマネージャー、以下ケアマネとする）の選定をするとともに、研究協力の依頼を行った。

### 3. 研究方法

研究を始めるに当たって、A村を中心とした広域連合、周辺の各市町村の保健福祉課と保健師へ、調査の概要及び方法を口頭と文書で説明し、調査者の存在を知ってもら

うこととした。これと平行して、共同研究者とともに、介護保険の新給付や調査対象者が利用するであろう通所デイケア施設への依頼、訪問なども行った。

#### 4. 調査期間

2005年8月～2006年7月

本研究の研究目的に沿い、研究1は、ケアマネの高齢者に対する考え方・支え方、研究2は、通所介護者の生きがいとデイサービスへの思い、研究3は、今後の方策として中山間で生きていく「高齢者の私」の見守りネットワークの方策を検討した。

### IV. 結果

#### <研究1> ケアマネの高齢者に対する考え方・支え方

##### 1) 対象の概要

全員女性で11名の後期高齢者であり、年齢は最高101歳～最低78歳、平均年齢84.2歳であった。介護度（改正前）は、要支援は7名、要介護1は4人、要介護2は1人であった。家族と同居しているのは、4人、独居は8名であった。

##### 2) 担当ケアマネの概要

担当したケアマネの平均年齢は、42.8歳、ケアマネ歴は11年～2年（平均4.5年）であった。

##### 3) 結果

###### ① [全体観察]

高齢者に対する考え方・支え方に関してのケアマネの語りを、類似性・関係性で分類し、9内容に集約された。それは、「しっかりした人」、「(生きていくうえでの)工夫ができる人」などの利用者の『対象者の特性』を理解する。その上で、利用者宅への「長居をしない」ことや「利用者が人の手を煩わしてはいけない」などの思いをくみとり『配慮すること』の必要性を述べていた。

さらに、ケアマネが利用者の「前回との違いを良く聞き出し」『身体状況をしる』その上で、「今の状況をいち早く察知し」「確認・観察すること」で『観察・介入をする』ことの重要性を語っていた。時には「行きすぎの発言に対しては折を見て」『たしなめる』などや「昔の懐かしいこと」や「楽しみ」を『引き出す』ことによって、利用者の『生きがい』を皆で『支えること』の大切さ、利用者との関わりがケアマネとしての『利用者からの学び』として得られることなどがまとめられた。

これらのことから、ケアマネの考えているキーワードとして、ケアマネ自身が担当している利用者をどのように把らえているかが重要となる。利用者をよく見ること、意思決定は利用者及びキーパーソンによる、プラス専門的な助言、人としてのかかわり、学び、支える、利用者の普段との違いを観察する、そのときの状況判断を行い、問題の見極め、必

要な支援の検討、(信頼関係の上に立った)苦言を呈するなどが提示され考慮されているといえる。

利用者の抱えている問題に目を向けることも必要であるが、何を目指して、どうすれば利用者が自分自身や周りの状況を織り交ぜ、どのように折り合いをつけていくかが重要な点である。今の利用者の生活そのものに焦点をあて、利用者の全体像を描くことの必要性や、やりたいこととできること、何が現時点で可能であるかの発見を利用者とともにやり、実践できる方法論を考慮することで、高齢者及びその家族の生きることを支えていくことであるといえる。

② [焦点観察]: 上記のうち 1 名の事例 C に焦点を当てる (支障のない範囲で修正を加えている)

事例 C さんは、78 歳、後期高齢者の女性、独居生活者である。C さんは、デイケアから 40 分の遠隔地域に居住している。娘、息子などはすぐに駆けつける距離には住んでいず、利用者訪問は、2 - 3 週に 1 回ぐらいである。ケアマネの C さんの支え方・考え方は、《身の危険を感じだしたらだめ、命が自分で守れないようであれば施設》と考えている。家族も本人も <工夫ができる人たち>、<家におればよいのです>、<這いずり回ってでも>、<サービスを受けて自宅におればよい>、<家にいることは、毎日考えること (自分の頭を使うことである)>、これら全てを受けて、それらを何とかして支えていくことが必要である。<自分で (他者に) 発信できるうちは大丈夫>、なんとしてでも自分の住みなれた家にいるべきである。

高齢者は、C さんに限らず、自分自身の住み慣れた家で、自分の頭を使うことで生活ができること、それを何とかして支えていくことが、高齢者を見守る人の役割であるとの考えをケアマネがきちんと持っていることである。そのためには、24 時間どのような生活を高齢者が送り、地域住民及び行政を含めた周りの人々はどのように支えていくかを考え検討することが必要である。それが可能になることで、中山間で生活していくことを可能にすると考ええる。

<研究 2> 通所介護者の生きがいとデイサービスへの思い

#### 1) 調査方法

B 村にある通所介護施設及び訪問方法による。インタビュー調査 (個人・グループ) によって、「生きる支えになっていること」、「デイサービスでの思い」を語ってもらい、インタビュー内容の逐語録とインタビュー後のフィールドノーツの使用により、類似性・関係性で分類した。

#### 2) 対象の概要

全員女性、後期高齢者の 5 名である。最高は 89 歳、一番若い人で 78 歳、介護度は全員が要支援 (調査時) であった。1 名を除き 4 名の利用者が独居生活者である。各居住地

から村の中心地にあるデイケアへの距離は、時間にして片道 40-50 分、距離にして 25km である。調査対象者は、中山間地域であるこの地での地元出身者が多くを占め、最高で 86 年間この地に住んでいる。生家も婚家も同じ利用者が 2 名、他の地域から嫁いできた利用者でも 57 年という年数をこの地での生活を営んでいる。

### 3) 結 果

①生きる支え：a《畑をすること》＜野菜を育てる、花を植える、季節の山菜を採ること＞など、b《日々の生活をする》＜食事を作り、食べる楽しみ、洗濯をし干す、病院に行く、季節のまつりごとをする＞など、c《他者との関係作り》＜近隣者との電話、ケアマネとの話し、ヘルパーの訪問、移動スーパーでの買い物、気のあった人との語り、かご作り＞など、d《自分自身を支え思いを貫く》＜元気である、何の不自由もない、貯蓄する、段取りができる＞など

②デイでの楽しみ：a《デイでの作業》＜カレンダー作り、かご作り＞など、b《風呂に入ること》＜村の温泉＞など、c《気の合う者同士との会話》＜話が楽しみ＞、d《施設の近所での買い物》＜好きなものが買える＞、e《デイでのレク》＜ひな祭り、誕生会＞など、f《食事・おやつ》＜手作りでおいしい＞など

「生きる支え」においては、山間部に居住地があるため日が短いことぐらいで、何の不自由もないと考えている。日々の色々なことを一人で考え、工夫や段取りをしないといけないから忙しいことなどが生きがいとなっていた。これには、利用者自身が最低限自分のことが自分ででき、日常生活においては、少しの支援で生活できているという現状から自身の生き方のビジョンをしっかりと持ち、パワフルに生きているという実感とともに、躍動感が伝わってきた。

「デイでの楽しみ」では、施設到着後の体調管理後の入浴が村の温泉を運んでいるため、一番の楽しみとなっている。昼食は、施設の手作りのため、楽しみの一つとなっている。

### ③デイサービスへのニーズと制約

語りから、《ニーズ》として、＜デイの時間は短くてよい＞、＜日が昇ってからの迎えでよい＞、＜時間的ゆとりを持ってゆっくり準備したい＞、＜トイレに行きたくなる＞などをもっていた。《制約として》、＜時間的拘束が長い＞、＜時間が早い（朝が早く、夕方遅い、家に着いたら暗い）＞、＜水分の制限をしないといけない＞などであった。

「デイでのニーズと制約」では、時間的拘束が長く、ゆとりをもって準備ができず、不自由感を全員が持っている。冬場は特に 6 時には起床しないとできないことや利用時間が長いことによる疲労感があり、水分制限など心身への負担感も大きいことが制約となっていた。

上記の『通所介護者の生きがいとデイサービスへの思い』はその一部を第 32 回日本保健医療社会学会（2006 年 5 月 13 日－14 日）で「中山間地域に住む人々への自立支援の検討－通所介護者に焦点を当てて－」として発表した。（資料 1）

### <研究3> 中山間で生きていく「高齢者の私」の見守りネットワークの方策検討

1) 調査方法：中山間地域に居住しながら、なおかつデイへの利用者がある社会福祉協議会の（以下、社協）所長及び指導員、NPO 法人会長に、今後の方向性として、どのように中山間地域の人々を支援していけばよいかについて語っていただきその方向性を抽出した。

2) 社会福祉協議会の所長及び指導員

3) 結果

① 現在の状況：「利用者のことを一番に考えること」それが大事である。しかし、  
〔所長〕社共としては、役場からの依頼を受けて実施していることが多いので。

現在の状況では、他の地域の社協では不要という声上がり、閉鎖されるところもある状況である。しかし、

「ここでは、他の地域より、経営参画の打診があるが、特に中山間地域においては、民間参入ができきらないところがある（距離、時間、金額などの面からも）」、それらを考えると、まだまだ社協の出番があるといえるのではないか。

4月からの予防給付としての社協の取り組みは、要支援の1・2の人を対象に、100歳を実施して、新しい取り組みも行っている。また、中山間地域には、廃校になった小学校や中学校を利用して、1回/月に「ふれあい」サークル活動（かご作り指導など）を実施している。

「これ自体が活発になることである。村の中心地にある活動は毎週開かれており、地域格差があるのは仕方ないが、それが続けてできること、そして、それを活性化していくことだと考えている。50代のこの人に頼ってはいけないが…」

「デイにくる場合も、休む場合は、『デイ休みますではなく、温泉休みます』って、言います。その点では、温泉があるということ中山間の人たちは、とても楽しみにしていることがわかります」

地域全体で、ボランティアをしてお金を受け取るという感覚が、地域住民には抵抗意識があるので、この村ではなかなか実現が難しい状況である。

また、交通の便も、中山間地域は悪く、人に車の手配を頼むこともはばかれる状況でもある。このことが、ココに居住する人以外の地域住民意識の問題もあり、複雑な様子を呈している。

〔指導員〕

4月からの予防給付移行に関して、支援できることの模索を行っている最中であること、今後のデイの利用日数などについて、各自異なるため、通所デイでできることを検討している状況である。

「4月からの予防給付に関しては、1回～2回/週、になることの可能性を話し、今後どのように各自が取り組んで言ったらよいかを、送り迎えのバスの中で説明をしている。支援をどうするかは、できることを支援すること、例えば買い物も自分の目で見て買うことは、本人の楽しみになればよいのではないか」

「中山間地域の人には元気なうちはそれでよいかも知れんけど、どうなることやら」  
「できることを支援していくしかない、中山間の人には、南部の村の中心の人に比べて、どうしても切り捨てになるから」。

遠距離の送迎の時間を上手に活用し、コミュニケーションを図り、良い人間関係の築きができている。さらに、関わりの中で利用者のニーズも上手に引き出されているといえる。

〔NPO 法人会長〕：生きがいのために、歳がいった場合に使えると思う。

唯一、A 県に存在するこの全国ネットの NPO 法人である。本部は大阪にある。現在の社会福祉協議会の事務局長が発足を考え、何らかの方法でこの存在を知ったことにより、学習を深めできる形で導入に踏み切った経緯がある。これは、会員制で会員以外の人も寄付金の形で利用はできる制度である。働き盛りの人は、仕事があるので難しい。近隣5ヶ町村との存続も図ったが、取り組む組織の考え方などにより、できづらいと考えた。そのため、この町独自で実施する道を選択した。また、中学生や小学生もボランティアとしてやってもらうことが、次世代を育てることにつながるので必要なことと考えている。

「どういう状況でも受け入れてみようという気持ちがある。来れば何とかなるという。それは、利用者のニーズがあるから受け入れようということです。」

活用できる人材、動ける人、車に乗れる人、など活用できる資源は、フルに活用するという、方向性が明確に見える。

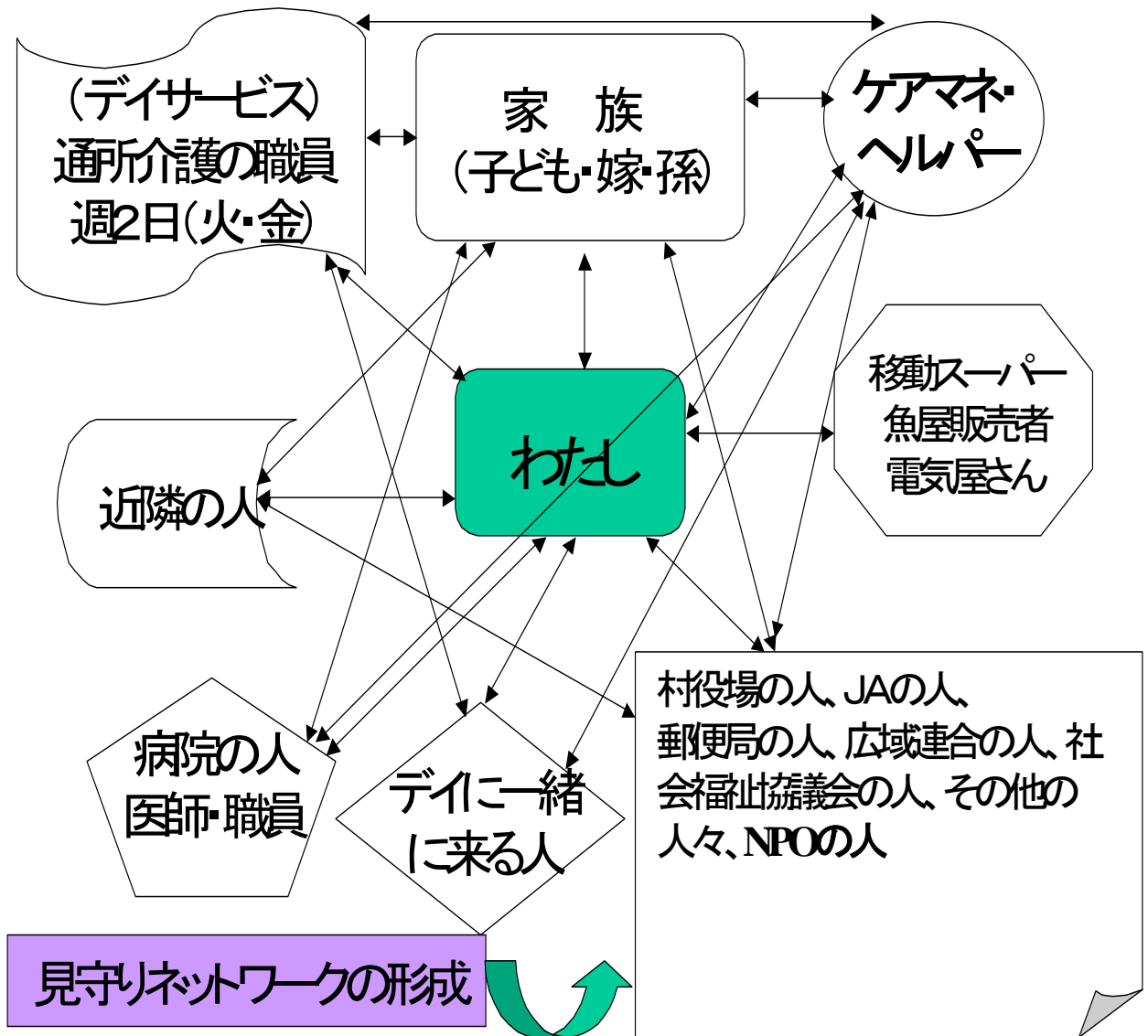
「その中にも遊び心がないと続かない。全国大会もあるから、クラブ活動をやっている地方もあるから、まだまだやることがある。良いと思ったことは、すぐ受け入れて実施する」

何が現在求められていることか、検討し、役場などよりも先取りをして実践していることが多くある。中山間地域への人々への関わりについてもやっていることが多くある。

「町によっては、タクシーチケットもあるが使用に際して、制限される。また、片道 50 分もかかると、気兼ねする。また、バスだと病院受診に行く本人の時間と合わない場合がある。だから、片道だけは、利用してもらい、帰りはタクシーという方法をとってもらったりする」

ニーズがあれば、可能な方法で、可能な人がチームを組んで何とか乗り越えようとしている。5ヶ町村のみに限らず、ネットワークができることが良いとは考えている。

図1 中山間地域に住む私の生活を支えてくれる人々の全体像



この中山間地域で生活していくためには、「わたし」を中心としてみた時に、関わりを持てる人が、周囲にどれだけ存在しているかが重要といえる。そのためには、「住み慣れた家やこの中山間地域」において、日常生活領域に可能な限りにおいて、生活している人に密着した「見守りネットワークの形成」あるいは、NPO 法人の活用、有償ボランティアなどの「お助けメイト」の形成が必要と考える。

その仲介役をとって行くのは、主として行政であろう。その他には、限られた人的ネットワーク、中でもこの地域の特徴であり、最大の関わりをしている JA などの農林団体を有効に活用していくことが可能であろう。

現に介護保険の改正の中での新たなサービス体系の確立として、「地域密着型のサービス」を提言している。具体的な明示はないものの、それぞれの機関で利用者の「生活圏域」丸ごと単位として考え、「地域の多様性を活かした〈面〉の整備」の必要性を述べている。



私の生活を支えてくれる人々の全体像の中で、それぞれの役割を担ってもらうことはもちろんであるが、その中心を担っていくのがケアマネであり、利用者を受け入れているデイサービスを提供している機関であると考え。

## V. まとめ

中山間地域に居住する人々の高齢化は、ますます拍車がかかっている。しかも、独居生活者が多い。その多くは、後期高齢者であり女性が多くを占めている。

今回、中山間地域で生活する人々とその周辺領域の関わる人々をタイムリーに追うことで、その中心的調整者は、ケアマネジャーであり、その仲介・調整役割の重要性が浮き彫りとなっているといえる。

## 本研究の限界と今後の課題

本研究は、ケアマネ4人と対象者が少ないこと、なおかつデイケアを利用している遠距離にある中山間地域に居住している利用者は、調査地域において全数5名と少ないことで本研究の結果を一般化することには限界があると考え。

ただし、中山間地域で比較的近距離にある人への調査を行うことで、支援の重要性やネットワーク作りにヒントが得られると考える。さらに、継続的な研究が必要と考える。

本研究は、中山間地域に生活している高齢者に限定して研究を進めた。中山間に限らず、高齢者が「自分の家で、イキイキと生活していくためには、ネットワークを確実にし、その中心として、情報伝達や仲介・情報提供・発見していく、中心的な調整機能を果たしていく役割がケアマネと考える。病院においても入院期間が短くなり、ますます在宅で生活しながら周りの人々の支援を必要としていく人々には、高齢者に限らず、必要なネットワークであると考え。更なる研究の継続を進めていく必要性を感じている。

## 謝 辞

本研究に助成をいただきました財団法人 在宅医療助成 勇美記念財団に心よりお礼を申し上げます。また、本研究を進めるにあたりお忙しい中、快くご協力いただきました高齢者及びご家族の皆様、ケアマネジャーの皆様及び施設長様、デイケアの皆様、NPO法人の皆様に深くお礼申し上げます。

## 引用・参考文献

山本努 1996『現代過疎問題の研究』恒星社厚生閣

田畑保 1999『中山間の定住条件と地域政策』

永山誠 2001「中山間地域に関する政策的問題」『高知女子大学紀要 社会福祉学部編』

50 巻 1-17

- 山根洋右 2001「農山村における中高年女性の健康実態把握と健康増進対策に関する研究」  
『日本農村医学会雑誌』49(6) 831-839
- 斉藤明子 2004「高齢者福祉におけるサービス提供者間の関係調整」『第77回日本社会  
学会』
- 石垣和子 2003「地域における看護の連携・継続・システム化について—介護予防を中心に  
して—」Quality Nursing9(6)
- 山田紀代美 1998「在宅要介護高齢者の介護者におけるライフスタイルと生活満足度に関す  
る研究」『日本看護学会誌』7(1) 17-24
- 時長美希他 2003「中山間地域における高齢者のヘルスプロモーション」『高知女子大学  
紀要 看護学部編』50巻 1-17
- 小泉美佐子 1998「高齢者の希望の源とその意味について」『日本看護学会誌』7(1)  
25-32
- 吉野明子・野嶋佐由美 1999「中山間で生活する人々の孤立感」『高知女子大学看護学会誌』  
24(2) 39-47
- 郷洋子・山岸春江 2005「山間地域に居住する同居高齢者の人との交流・外出状況の実態」  
『山梨県立看護大学紀要』vol.7 9-18
- 長門和子他 1998「中山間地域で生活する老年期の夫婦の健康に関連した価値観」『高知  
女子大学紀要 看護学部編』48巻 25-35
- 小玉敏江・長谷川美香 1997「地域の高齢者の健康観と日常生活行動との関連」『日本看護  
学会誌』6(1) 16-25
- 出口泰靖 1999「『呆けゆくこと』にまつわるトラブルのマイクロ・ポリテックス—家族介護  
者のトラブル体験に関する回顧的『語り』を手がかりに」ソシオロジスト No.1  
39-75
- 穂坂邦夫 2005「市町村崩壊」破壊と再生のシナリオ スパイス
- 水谷利亮 他 2001「介護保険」から「保健福祉のまちづくり」へ 自治体研究社  
「年報」村落社会研究-41「消費される農村」日本村落研究会編

【緒言】: 介護保険法の基本理念である「自立支援」を徹底する意味において、本年4月より、原則「新予防給付」の編成が行われ、要支援1、要支援2と認定された者がその対象となる。そんな中で中山間地域に居住しながら、かつ、通所介護（以下、デイサービスとする）を利用している利用者は、生きる支え、サービスに対してのニーズと制約をもっているかを明らかにする。

【研究方法】: 研究対象は、中山間地域に居住し、デイサービスを利用している利用者。デイサービス利用時、送り迎えの車中での語りに注目した。語った内容は、逐語録を出来るだけ早期に起こし、後日その内容の再確認を行った。その中では、1) 生きている支えになっていること、2) デイサービスでの思いについて、自然発生的に利用者間で語ってもらった。語られた内容については、類似性・関係性で分類しグルーピングを行った。

【結果および考察】: 利用者は、後期高齢者で全員女性である。デイサービスの一日は、施設到着後は、職員による本日の体調の管理（バイタルサインの測定、体調観察など）後、入浴をする。利用者によっては、カレンダー作りやかごづくり、休憩、体操、おやつなどをいただき気のあった者との話などをして過ごす。昼食後は、休憩や電子浴、全員でレクなどを行っていた。1) では、主として中山間地域で過ごす利用者の楽しみは、畑をすること、野菜を育てること、花を育てることなどであった。2) のデイサービスについては、特に要望が強かったのは、現在利用者の時間が4-6時間、6-8時間の者が混在し、夏の期間は、日が長いからよいが、冬の期間は時間が短くなり、朝が早いこと、夕方は日が暮れてしまい夜になるため、利用時間の短縮を切望していた。

介護保険導入においては、民間企業などは、中山間地域においては経営という視点においては参入しにくい点がある。結果、以下のことが問題点として考慮される。

1. 連携という視点においては、行政や民間との連携を図る必要がある。
2. 「地域」というキーワードが今後の保険制度改革の視点になるようであるが、生活者が何を望んでいるかを十分把握し、利用者にあった体制作りが必要である。
3. 中山間の生活者・利用者の現状に応じた柔軟な対応（政策・連携）が必要である。

【限界と課題】 本研究は、中山間地域からデイサービスを利用するために、往復2時間かけて利用している要支援、要介護1の方に限定されているため、全ての利用者の意見を反映されているとは言い切れない。しかし、本年4月から予防給付に移行する中で、地方行政で実施しなくては民間企業ではやりえない介入こそが行政の役割であり、投げかけのひとつになればよいと考える。一くくりでなく、利用者に応じた重み付け、柔軟な対応があってもよいのではないかと提言したい。

本報告は、平成17年度 財団法人 在宅医療助成 勇美記念財団「中山間地域に居住する高齢者を取り巻く生活環境と健康維持に関する研究」（研究代表者 細川 つや子）の助成を受けた。